

《分霊芸術の夜明け——御霊分けと分け御霊》
第 69 回美学会全国大会ポスター制作における制作背景

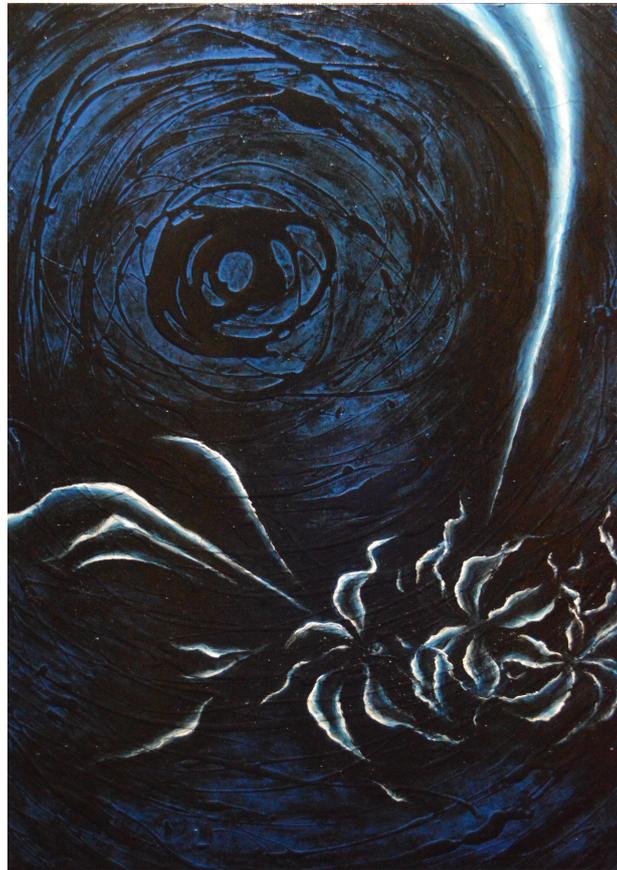
本橋 瞳¹

絵師・立教大学研究員

jamais-deja.com

hitomimotohashi28@gmail.com

2018年3月下旬、関西大学文学部教授蜷川順子女史より同大会ポスターの制作依頼を受ける。同4月下旬、京都にて女史より大会趣旨及びシンポジウムのテーマ（「ハート形」、「見えるものと見えないもの」）等について説明があった。後発にて「完成と未完成」をテーマとしたシンポジウムの開催も告げられた。制作については、印刷等の関係により、使用する色を三つ（白、黒、もう一色）とするという制約があった。他、描く対象、構図、画材などについては「自由」にお任せいただいた。



本橋瞳《分霊芸術の夜明け——御霊分けと分け御霊》
841×1189mm、板に水性ペンキ、ウレタン、東京、2018年6月

分霊芸術²。

心に〈ふれ〉る。腹は〈ふれ〉えぬ——深すぎて。頭も〈ふれ〉えぬ——硬すぎて。深淵と表層。

¹ 2018年7月に結婚し、9月より活動名を「絵師 本橋 Demir 瞳」としている。ポスター原画作成時（7月上旬完成）は入籍前、「絵師 本橋瞳」としての活動の最後の活動期間となる。

² 本文は以下の拙稿に多くを追う。とりわけ「分霊」については以下を参照されたい。本橋瞳著「分霊芸術論：真空の転移——ネーデルラント美術を中心に——」『RICM MUSICA SACRA』第6号、2016/2017年度 立教大学音楽研究所報、立教大学教会音楽研究所編、95-114頁、2018年。なお同稿は拙 Website、[jamais-deja——蛇瞳手蛇 by Hitomi MOTOHASHI DEMIR]内、[about]へも掲載。jamais-deja.com/about/

〈ふれ〉——「触れ/振れ/震れ/降れ/狂れ/.....」。振動、振る舞い、揺らぎ——不定形。腹から来る〈いきおい〉の内・外界に〈ふれ〉る「場」、及びその〈いきおい〉を上方、頭へと〈わた〉す——心。

内的選択——決する場としての所在三ヶ所。買い物例。「これは今いらないが、後々必要になる」——頭による選択。打算。目的行為。しかし当該購入物がのちのち何かの役に立とうと、購入に際し幸せを感じることがない。逆転。高揚感、瞬間湯沸かし器。限定品、キャンペーン、イベント等、今その時のみの「幸せ」に心を驚ぶかみにされる。末路、瞬間氷河期。「なぜこのようなものを.....」なる将来的な後悔の〈おとづれ〉——心の選択。真打ち。「これ、本当に好きなんだ」。手にした時も、時を経た今も、そしてこれからも、さびれぬまま持続する歓喜の〈おとづれ〉——腹からの選択。穏やかで濃密、幾重にも連なる芳^{かくわ}しき甘美。腹、真なる幸福の源泉——衝動目的（スピノザ）の生ずる「場」。日本的言語観のあらわにするもの——「腹を決める」、「腹がすわる」、「腹が立つ」（そして「頭に来る」）、「腑に落ちる」、「切腹」（その後「介錯」——断頭）。聖書においても——「私にはことばがあふれており、一つの霊が私を圧迫している。私の腹を。...」（ヨブ 32:18 [新改訳]）。医学的には「腸脳相関」³——腹と頭の密なるつながり。

無意識から意識への途上。ハート、漆黒のうねりからの現前——心は、腹と頭、無意識と意識の「あいだ」（木村敏）、鏡面であり、それらを隔絶するとともに連結する〈わたし〉である。〈わたし/私/渡し〉、透明な自己、匿名性、無垢で霊的、可変的で不定形の、常に更新し更新されゆく一種の〈うつわ〉。

〈うつ〉——「移/写/映/撮/遷/空/虚/鬱/現/...」。投影。つややかな漆のごとく、光沢が透明な表面となって遊んでゆく——瞳、鏡面、水面^{みなも}。闇をかたどる湖面の〈かげ〉——ナルキッソス。その瞳に〈うつり/うつされ〉た〈うつろ〉に〈うつり/うつされ〉ゆくその奥に、いったい何が〈うつり/うつされ〉るのか。瞳の「空」に「映し/移され」たそれは、「写し」、「撮され」、絶えず「虚ろ」いゆく〈わたし〉の「鬱」なる「現」^{うつ}を一瞬々々〈うつ〉してゆく。

漆黒にうねる大渦に/へ/とともに〈うつり/うつされ〉る——彼岸花。秋、年に七日ほど咲き乱れる、青きほのお。静謐かつ妖艶、懐かしき香り漂う死の舞踏。こちらとあちら、あちらとこちら、さかいなく、あいだとなる。わけ、むすび。彼岸と此岸、此岸と彼岸の〈はし/端/橋/...〉〈わたし〉——不可視と可視にゆれる煌^{きらめ}き。徒然なる注視に、〈うつり/うつされ〉る鏡面や告げらむ——果たしてどちらか、あるいはどれか、もしくはどこか。

〈うつり/うつされ〉る〈うつ〉なる〈うつろい〉に遊べ——分霊。御霊を分けること——御霊分け。分けられた御霊——分け御霊。作り手のまなざし——「見えぬものと見えるもの」（副題「御霊分けと分け御霊」へと転用）。カオスからコスモスへ、混沌から現前への移行の徒然なる目撃——〈わたし〉のまっとう。一転、「見えぬものと見えないもの」——観察者・研究者的視点、「リアリティ」（木村敏）からのまなざしに忠実なかたどり。基点の〈ことなり〉。現象としては同じことだ。螺旋階段——見上げれば右回り、見下ろせば左回り。螺旋であることに変わりはない。「現象をありのまま見ねばならない」（西田幾多郎）。洞窟例（ソクラテス、プラトン）——当初、「囚人」はいなかった。いたのは「人間」であった。手足首が縛られて初めて「囚人」となった。拘束したのはまぎれもない「己」であることに、まずもって気付かねばならない。振り向き、洞窟から這い出なのだ。真なる光の源泉から瞬間永劫の恍惚の恵みがこんこんと湧き出ぬまで、「決して振り向いてはならない」（イザナギ、オルフェウス）。繋がった〈ひも〉——「己」、「9」から「8」へ。真なる〈わたし/渡し/私〉、〈うつわ〉、〈うつ〉の〈わ〉「和/輪/環/...」の完成。本来的な芸術のあり方に回帰しつつ、常なる更新に魂も身も捧げること——全霊全身、天任せ。分霊芸術の夜明け。

³ 通常「脳腸相関」と呼称されるが、とりわけ本来的な順序に照らせば逆転した言表の方が正確である。福土審『内臓感覚：脳と腸の不思議な関係』日本放送出版協会、2007年。